

2027年国際園芸博覧会政府出展懇談会（第4回）

議事要旨

■日時：令和6年2月26日（月）14時00分～16時00分

■開催場所：三番町共用会議所大会議室 ※オンライン併用

■議事

- ・自然観から未来まで全部やっていると教科書的になり、面白い展示はできない。
- ・前回までの懇談会の議論をとりまとめた「2027年国際園芸博覧会政府出展基本計画」はコンセプトであり、全体として体系的でなければならないが、全てを展示で行うものではない。一種の生涯教育や国民教育として伝えたらどうかと提案してきた。
- ・展示については、博覧会の展示というルールドライブでいくと、総花になるので、引き算が必要。屋外展示については、場所の特性等を踏まえて、ミッションドライブでやることを意識いただいている。
- ・実態として日本の将来ビジョンがどう描けるのかを強烈に来場者に印象づける必要がある。
- ・日本の自然観はイントロダクションで少し書くかテキストで配布するくらいで十分。今回の検討に当たっては、日本庭園とは言わない方がよい。Japanese garden では枯山水を想起させてしまう。当該地は里山でもあり、関東の風景が必要。ミッションドライブで進めていただきたい。
- ・展示面積が約2,500㎡は人が展示を見る面積としてかなり大きく、2,000㎡でもこれだけの内容があると疲れてしまう。展示面積が1,500㎡くらいであれば集中力が続く印象。内容が幅広くて濃いゆえに、全体像で見せるのは難しい。
- ・展示はたくさんあるが、目玉の展示がないとなかなか世間に浸透していかない。
- ・日本の自然観の部分で、現世のことについて色々と整理されていたが、日本の自然観から、さらに死生観や宇宙観まで広がるような空間構成がなされると、例えば極楽浄土のような、文化的・歴史的背景から来る自然・宇宙との共生という角度もあると、現世に限らず、展示に深みが増す。
- ・展示面積は2,000㎡でも大きい。会場全体で展示があり、政府出展だけで網羅的に見せようとしては面白い展示はできない。どうインパクトのあるものに出来るかが重要。屋内と屋外でバラバラに取り組むのもよろしくない。
- ・現状の展示構成では、日本の危機意識が語られていない印象。農水省でいえば、耕作放棄や担い手不足、自給率などの危機的なことを語っていただきたい。国交省としても街路樹に除草剤をまかれるような状況。欧米では、温暖化に対応できる樹種の転換や緑化基盤の再形成で、都市の温度を上げないようにしている一方で、日本は予算が無いので街路樹を切っ

- まおうという流れになっている。そういった危機感を政府の出展として語っていただきたうえで、未来を語っていただきたい。
- ・また、展示内容が会場の各所で被っている。重複している内容は相互に調整して落としていく必要がある。政府出展の検討を踏まえ、博覧会協会でコンテンツを削る作業が必要。
 - ・目玉については、1990年の大阪花博では、ラフレシアが目玉であり政府苑が担った。今回の博覧会でも政府出展が担う展示面積は大きく、政府出展で目玉を1つ置いていただきたい。
 - ・今回の博覧会では来場者の平準化が重要だが、園芸博の特色として季節が変わると二度と見られない展示が多く存在する。政府出展でも、話題性のある展示を季節ごとに少しずつ変えていき、一度見逃すと二度と見られないという演出も必要。
-
- ・ドーハでも大きな水害が出ている。水害や食料自給の危機的状況などのつらい側面が、今回の案ではどこを見れば良いのかがよく分からない。
 - ・ラフレシアのようにアトラクトするものは必要。
 - ・政府出展では、アート作品だけではない。例えばダボス会議の今年の議題はもっぱら気候変動であった。また、ウクライナ侵攻による食料安全保障が危機的に案じられることを国民メッセージとして、あのときそうだったと思わせることは非常に重要。
 - ・前回の懇談会以降に起こったことといえば、LLMである。この1年で非常に勢いが出たが、今の政府出展の検討には含まれていないため、活用を検討いただいても良い。
-
- ・両省でやっていることもあり、縦割り感が否めない印象。
 - ・少子化の中で土地利用や農業をどうするのか、これらを新しい視点で提示できると良い。横浜は都会だが、膨大な土地が広がっており、住宅と農業の問題を解決できるものが提示できると良い。地方と都市、生産者と消費者の二項対立でなく、マージしていく社会を提示していくことも1つの案。
-
- ・農業の未来は単にスマート農業ではなく、農業技術会議で何ができるのかを検討した方が良い。
-
- ・若い方をターゲットにする点では、普通に比べ何を変えるのか検討が弱い。若い方に来ていただけるような見せ方をさらに検討する必要がある。
 - ・危機感については、Cゾーン（現在の諸課題）で何を感じ取ってもらうかが重要。網羅的に展示で全部やるのは絵に描いた餅になってしまう。今日は全てのパーツを示していただいたものと認識しており、これから取捨選択を進めていただきたい。
 - ・生物多様性については、農業・園芸は虫に頼っている部分もある。そういった、生き物同士の連絡を子供たちに気づいてもらうことも考えられる。
 - ・スマート農業については花を作るものがあまりない印象。公園の管理も遠隔で見せるなど、技術で色んなことができると若者が興味を持てて良い。

- ・展示面積が 2,500 m²は疲れる展示の広さ。来場者がすべての展示を立って見ていただくのは厳しい。どこで来場者に座っていただくのか検討いただきたい。
 - ・前回の懇談会では、小学生など子供の教育が議論になっていた。こどもとの種まき体験などは良いが、積極的に遊ぶところ（エビ釣りや魚取りなど）を入れるなど、植物や農作物だけでなく生物も取り入れられると子供も楽しめる。
 - ・ドーハでも園芸博をやっており、横浜につなげる、ということだったが、何を明確につなげるのか検討を進められると良い。
-
- ・屋外展示は安心している。氾濫するように考えるというのは国際的にも発信できるメッセージ。園芸博は良い機会であり、是非取り組んでいただきたい。
 - ・屋内展示は盛りだくさんの印象。昨年度議論していたことと国際的なトレンドを捉えつつ、メリハリをつけていただきたい。ポイントとしてはサステナビリティとサーキュラーであり、今時の中高生は環境学習において、大抵のことは知っている。政府出展では、それ以上のことを伝えられるようにしなければならない。
 - ・サーキュラーの観点では、1～2週間に1度、生花の展示を変えるという説明があったが、廃棄するのではなくて、展示プロセス全体で循環できるような仕組みを検討いただきたい。
 - ・危機感が薄い感じがする。
 - ・座る場所はぜひ作っていただきたい。子供連れの家族は今の内容では行きづらい。
-
- ・展示はインパクトのあるもので来場いただくものでないと厳しいが、内容を体系的に学ぶような機会をつくってほしい。それを受講した人を含めて、入場者としてカウントする仕組みを以前から提案している。学んだ人が何人いたかを成果指標としていただきたい。
 - ・2点提案がある。会場の展示内容の全体像を把握して、展示を分担したうえでメリハリをつけて、ストーリーができるようにすることで強烈にインパクトが出せる。また、技術会議は研究者集団であり、その知恵が来ていないのはもったいない。耕作放棄地や農薬の問題などネガティブな問題もあって良い。大至急進めていただきたい。
-
- ・今後は建築と展示の調整になる。
 - ・屋内展示については相当引き算が必要と考えている。
-
- ・小中高校生にコンテンツを提供するプラットフォームとして MEXCBT（文部科学省 CBT システム）がある。学校で既に環境教育に取り組まれている中で、そこを政府出展展示で越えるために、学校に自発的学習として誘導するのか、こちらから働きかけて誘導するのかの検討も必要。
 - ・また、大阪・関西万博との違いや連動を昨年度も申し上げた。ドローンで種まきするのであれば北海道での広大な空間でやる方がインパクトはある。2025年には HAPS のデモンストラレーションが想定されている。引き続いて、細部に取り組むという接続性が出せると非常に

分かりやすい。

- ・教育については、小中高生だけでなく生涯学習としたい。広く国民にアピールし、広がることが重要。これまでの農業の世界は技術の世界が多く、国民一般の文化・教養とまではなっていない。みどりシステムのような科学的アプローチも重要だが、もう一方にこころの話があり、こちらが農の本質。放送大学や農政の広報番組やシンポジウムやフォーラムを開催しても良い。
- ・農業の最先端の技術を見せる計画となっているが、バイオサイエンスと農業は密接に関係している。バイオサイエンスの応用場面が農業だったという意識が若い人には薄い。
- ・広報・行催事については、大学生等を巻き込んでいただきたい。また、若者が関わる余白を残していただきたい。大人が全てお膳立てしてしまうと、関わりしろや余白がなく、全然乗らない。
- ・静的な展示だけでなく学びのプログラムを色んなチャンネルで伝えて欲しい。24年度の後半や25年度からはじめ、本番につなげるなどしていただきたい。
- ・イベントは人が中心であり、展示の緻密さではない。引き算どころかリアレンジメントをしていただきたい。
- ・ターゲットが若者に設定されているのであれば、特に屋内展示では修学旅行生など団体客を受入れることも視野にキャパシティを検討する必要がある。
- ・屋外展示に関し、コアとなるフォーカルポイントの設定はされているのか。屋内外のどこから何を見せ、どこが見せ場かを具体的に検討することが望ましい。他方でフォーカルポイントでは滞留が生じやすいため、運営も視野に入れつつ検討いただきたい。
- ・博覧会は会期が限られており、会期後のレガシー（出展物の後利用・参画いただいた方への還元）も考えることが重要。
- ・グリーンインフラは欧と米でも概念が違う。博覧会の機会を捉え、歴史や先端技術を取り入れた日本独自のグリーンインフラを打ち出しても良いのではないかな。
- ・コンセプトをどう伝えるかが重要。特に「明日の社会と暮らし」では、花や緑が、これらの課題をどう解決していくか、メッセージをハッキリと明確に伝えた方が良い。
- ・例えば、オフィスにおいて、緑被率が何%あると良い、といったような科学的なエビデンスも展示で裏付けてほしい。
- ・緑を取り入れることのメリットを伝えた方が良い。現代は都市と農業が分かれている状態だと思うが、両者が融合した方が住民の幸福度も高くなるのではないかな。
- ・自然には「健康」の要素もあるが、展示の要素として「健康」が薄い印象。土壌の状態も健

康とは関連しており、日本の健康寿命が長いことも世界的には売りの1つである。

- ・屋内外が一体となる境界部を大事にする必要がある。「半屋外」は本博覧会のテーマにもなるため取扱いが非常に重要。縁側」は世界的な言葉になりつつあり、具体的にどのような空間になるのか期待したい。
- ・建築物については、全体に馴染むようにし、あまり突出した形にならないように留意が必要。片屋根のように一方の壁が高くなりすぎるのは控えた方が良い。屋根の高さは抑えるようにし、軒を出した建築の方がこの空間には馴染むと思われる。

以上